

ステンプル・パス



1971-72年 初期の日記より

春

山の高い尾根を東に向かって探検した。頂上に到達し、振り返る。木々が邪魔でよく見えないところもあるが、素晴らしい眺めだ。多くは幹の太い古木だが、あまり高く伸びておらず、どうやら発育が不十分で、そのため伐採されなかったのだろう。頂上付近で後ろを振り返ると、1羽のライチョウが見えた。魚の缶詰にして約1缶の量に相当する分量の肉と引きかえに、22口径カートリッジを3つ、消費した。山小屋の手前で、ウサギ1匹を撃とうとしてしくじり、もう1つムダにした。仕留めるべきだったのに、緊張して気持ちが乱れたのだ。これまでにウサギを撃ったことがなく、仕留めていたら、リスにくらべ、かなり大きな肉塊だったろう。

キャンプ用に小さい差し掛け小屋を作ろうと尾根に登った。さらなる探検のベースに使えればいいのだが。獲物は見当たらなかった。強い風で、雪が激しく降っていたからだろう。リスたちは悪天候が好きではないらしい。しばし探索し、山小屋の北東のやや低い尾根を歩いた。今日は何も撃っていないのだが、肉は要らない。本日の食料プランに魚1缶が含まれるからだ。(1週間につき1缶) その日の残りの作業は次の通りだ。ロウソク作り。ロウを受けるロウソク立て作り。ドアに風雨よけの飾り枠を取り付ける。コートハンガーでフックを作り、ライフルをかけるため壁に取り付ける。(このささやかな空間で、どこに何を置くか悩んだが、一步前進だ)

今日はやや暖かさが戻った。4、5時間、戸外で過ごす。わき水のすぐ上に、山小屋の横を流れる小川の源泉があり、高く伸びる木々に囲まれた美しい溪谷がある。そこに3匹の鹿の一群がいた。その後、尾根で、何匹か正確に数えられないほどの、鹿の大群を見た。高い尾根に吹きすさぶ風は、かなり激しかった。帰り道で運の悪いことに、砂利道から脇に入り、ここに登ってくる途中で通りすぎた山小屋に滞在しているマヌケ野郎に出くわした。そのバカが言うには、冬で一時解雇されたので、“今やずっと”ここで過ごすつもりだそうだ。ひとりきりになれる場所は世界中のどこにもないらしい。そいつとウマが合えば我慢できなくもないが、実際、そのバカは嫌いだ。

昨日今日はスノーシュー歩きが快調だ。最近しばらく暖かい日が続いたせいか、雪がクラスト化している。今日、森で、なかなかよさそうな手つかずの小さなエリアを見つけた。坂はそう険しくない。尾根の風が地表の雪をいくらか吹き飛ばしたのか、土が緩み、大きくなった野生のタマネギを見つけたので、掘り起こした。冷たい風が吹きつける中での作業は骨が折れ、先のとがった枝で掘らなくてはならなかった。掘り起こせるタマネギを見つけるとは思わなかったので、小型スコップを家に置いてきたからだ。帰る途中、松の木のところ、1匹のヤマアラシを見つけ、撃った。22口径カートリッジを2つ消費。最初は死んでいるように見えたが、近づくともまだ息があることに気づいた。頭部がふさふさとした体毛とトゲにおおわれ、脳がどのあたりか特定できなかったので、おおよその見当をつけて引き金を引いたのだ。解体には、かなり手こずった。なかなか皮が肉からきれいにはがれず、当然トゲにも注意しなければならない。腹の中にはサナダムシがうようよいた。それをきれいにしてから、自分の手とナイフをリゾール石鹼で洗い、残りクズは燃やした。もちろん私は、その肉をおいしく調理するだろう。

今朝は雪の中を数時間歩いた。戻ってヤマアラシの残り（胸部から取り除いた心臓、レバー、腎臓、脂肪の塊、大きな血の塊）を30分茹でた。茹でたての腎臓とレバーをいくらか食べてみると、こってりとしてうまい。血の塊も口にした。味は良かったが、パサパサしていた。食感をそこねるほどではなかったが。それから心臓とレバーの残りをスライスし、脂肪の塊と一緒にフライパンで炒

めた。この調理法でもかなりいけたが、やはり茹でたての味にはかなわない。肉を茹でた深鍋には、濃い色の、うま味がつまったスープが残っていた。血の塊を細かくほぐし、ヌードルひとつかみと一緒にスープに入れ、さらに煮込む。とびきりうまいスープが完成した。

数日前、やや固いやまアラスシの肉を噛んでいると、歯の根元あたりに、はっきりと痛みを感じた。ここでの食事の大半は柔らかいものばかりなので、固いものを噛んだせいで具合が悪くなったのだろう。痛む部分の左側は、じきに治まったが、右上部分の痛みは続き、さらに悪化している。今日、歯ぐきが感染していることに気づいた。咀嚼する際に、歯ぐきと歯の間に引っかかった肉のかけらが原因ではないだろうか。肉の残りカスを取り除くため、歯ぐきと歯の間に糸切れを走らせると、糸に少し膿みがついてきた。悪いものが出てきたなら、そのうち治るだろう。

このあたりに生息し、私が知るうちで個性を備えた数少ない動物たちでは、リスが1番興味深い。(シマリスが2番目)ウサギややまアラスシを殺すことに良心の呵責は覚えないが、リスを撃つのは気がとがめる。彼らが好きでたまらないからだ。

今朝はマイナス17度。寒波に突入したらしい。空は澄み渡っている。今朝、火を起こしてからまずしたことは、ポット1杯のココアを作ることだった。この程度のささいな事柄にわざわざ触れたのは、そのような環境下で、ココアがこの上なく美味に感じたからにほかならない。今日はかなり怠惰な1日を過ごした。書き忘れていたが、やっと歯ぐきの痛みから解放された。

コヨーテを撃った。わが射撃の腕前だと言いたいところだが、単なるまぐれ当たりにはすぎない。新雪が降り、薄く層になっていた。小さな尾根の頂上を目ざしていると、向こう側から、そのコヨーテがやってきた。我々は足を止め、数秒間、お互いを見つめた。それから私は狙いを定め、発射した。即座に彼を動けなくすることができなかつたのではと、やや不安だった。22口径、スタンダード・ベロシティ弾を1発だったので。だがコヨーテは倒れた。近づくと、彼は前脚でどうにか体を起こし、後脚を引きずりながら坂へ向かおうとする。麻

痺して満足に動かない体で。どうやら背骨に弾が当たったようだ。ハイスピード、ホローポイント、ロングライフル用カートリッジ1発を装填し、小川のわきに横たわる彼を見つけた。再び前脚で起き上がろうとする動きを見せたところを、背後から撃った。弾は彼の胸部を貫通し、きれいな穴を空けた。

本心では、彼を撃ったのを後悔していた。あんなに美しく、俊敏な動物だったのに。しかも彼は私が初めて目にしたコヨーテだった。走る車から見たことはあるが、数に入らない。彼を山小屋まで運ぶのが大変だった。重さが13キロ以上はあったはずだ。肉はすべて貯蔵した。涼しい屋根裏に吊るしたり、雪に埋めたり、ジャーキーにするためストーブの裏にぶらさげたりした。皮はトウヒで作った木枠に広げたが、こびりついている脂肪や肉のかけらを取り、きれいにする作業が残っている。

今日、散策中、オスの大鹿が一頭、私の通り道を移動し、勾配のゆるい溪谷を横切ろうという過ちをおかした。大鹿は溪谷の深い雪に脚をとられ、立ち往生ぎみだと気づいたので、追いかけて、どのくらいまで近づけるかやってみることにした。大鹿はもがいていて、進むスピードはかなりゆっくりだ。溪谷の周辺は多くの低い木が茂り、彼の枝角が引っかかって思うように進めず、事態を悪化させているようだ。やってみると、スノーシューで彼のすぐそばまで近づけた。その時、大鹿はすでにかかなり消耗し、雪の中で横たわって荒い息をしていた。わきから近寄り、手であばら骨のあたりを数分間、なで続けた。下の山小屋の男がここまで上ってきて、あれこれくれた。チリ1缶、桃2缶、ハーシー・バー6本のパッケージ、フランクフルト・ソーセージの大きな包み1つ、それに現金2ドル。これらはすべて、先週、彼の木を切る仕事を手伝った手間賃だそうだ。彼が木は15ドルで売れたと言う。私が生活に困っていると思って、とりわけ気前よくふるまったのだろうか？ここで暮らすことで得られる満足感は、すべてを自分の手でまかなう点にある。フランクフルト・ソーセージよりも野生の肉を採りに行く方を好むということを彼にどう説明すればいいだろう。

今日はリスのワナを仕上げた。とてもいい出来ばえだ。太いゴムバンド12個を動力に、勢いよくぴしゃりと閉じる。リスをおびきよせるいいエサが見つかれ

ば十分だろう。ほとんどゴミから作ったので、材料費はせいぜい35セントくらいだ。ゴムバンド1箱、釘とネジを何本か。

ここのところ、晴天が続いている。キスマレを見つけ、サラダ用に葉を摘んだ。なかなかいける。スマレの葉にありがちな酸味もなく、とりわけビタミンが豊富だろう。夕方の散歩は、特に変化もなく、いつも通りだったが、この土地の美しさを強く意識した。この美は、目で見て耳で聴くものだけで成り立つのではないことを理解すべきだ。それには自由の感覚と関連がある。

この2日間ほど、素晴らしい夏の気候が続いた。いくつかの尾根を長く散策する。たくさんのアオリチョウを見かけ、2羽のオスを撃った。天候が悪いと、ライチョウは交尾の儀式をしないようだった。だが今日のような良いお天気だと、オスはまた気取って歩き回り、鳴き声を上げる。さまざまな合図があるらしい。ビンの口を吹くと出る音のような、メロディアスな調べに聞こえる。オスが首をそらせ、威張るしぐさをする時は、深いしわがれ声だ。メス鳥の短い鳴き声にも、いくつか種類がある。私が1羽のオスを追い、かなりそばまで近寄っても、飛び立とうとしないことがあるのに気づいた。求愛中のメスと離れたくないからなのだ。ライチョウは着地する時、ブレーキにするため、羽根でものすごく大きな音をたてる。オスが着地するたび、メスはお返しにと羽根をバタつかせるのだ。

晴れた暖かい一日。7時間、戸外で過ごす。北東方面に向かうと、サウスフォーク・ハンブグ・クリークの廃屋になったログハウスからそう離れていい場所に出たので、ハンブグ・クリークの上流に流れ込む小川をたどった。小川は1本の細い道路にそって流れている。ここでリスを1匹撃ち、1カートリッジ消費した。小川にそって進み、タンポポと、よさそうなタマネギを採取した。帰る道すがら、マスタード科と思われる菜っ葉を集めた。かじるとカラシの味がしたので、マスタード科に間違いない。食べても大丈夫だと判断し、口にした。これまで食べた中で一番サラダに適している菜っ葉だ。みずみずしくて、とてもやわらかく、ぴりっとした、それでいて辛すぎない程度のラディッシュの風味が味わえる。仕留めたリスは腹に子を宿した雌だった。2センチほどの大きさの胎児が4匹。シチューの鍋に放り込んだ。

今朝、16日間のハイキングから戻った。家にたどりつくと、ずっと水を浴びたくてたまらなかったの、さっそく小川に飛び込んだ。それから庭に水をやり、間引きをして、雑草を取った。夕方になってから、少し散策した。樹木におおわれた山々は、いくら眺め、いくら歩いて、未だにどこか高揚感をおぼえ、神秘の力を感じる。日が暮れてから、衣類を見直そうと毛布から出てみると、大気圏に再突入する人工衛星か何かではと見まがうような素晴らしい流星を目にした。それは長くてキラキラ輝く尾っぽをつけた巨大な火の玉で、何度かスパークし、空を北から南へと猛スピードで横切っていった。

ある隠された包みから 1977/79

秋

これから告白するのは一より正確に言うと、自慢したいのは一過去数年間で私が関与した悪事のいくつかである。とある小さな、稼働中の採鉱場“マインX”と呼んでおこう—私の山小屋から数マイルのところであり、ここから東にのびる尾根の南側だ。彼らは古いトラックに大きなディーゼルエンジンをのせている。岩にボーリングで穴をあけるドリル用らしい。砂糖を少量、ディーゼルエンジンの燃料タンクと、トラックのガソリンタンクに入れた。ガソリンに混ざった砂糖はシリンダーにひどいダメージを与える。研磨剤のような働きをするのだ。

フィールド・ガルチの廃鉱に、何者かが古ぼけたトレーラーハウスを置いていた。狩りのシーズンの間だけ使うらしい。このトレーラーに押し入り、いくつかネジをゆるめ、金属の窓枠をはずし、破壊して回った。(私には、窓をこわすことに対し、強い心理的抑制があった。たとえ音の聞こえる範囲に人がいないとしても) トレーラーから食料の缶詰をいくつか盗んだ。取り外した窓の下にベッドがあったが、そのうち雨水をぐっしょり吸い込むだろう。(次の年の夏、気づくとトレーラーはいつの間にか消えていた)

あるキャンプに行った—アウドドア関連業者のものらしい—トラウ

ト・クリーク排水路の東の分かれ道に沿って進んだ。連中はそこに囲いを作っている。森に少し入った場所で、道具を置いておく差し掛け小屋のようだった。斧を1丁盗み（この斧は今でも使っている）水を入れる5ガロンのプラスチック容器がいくつかあったので穴をあけ、ストーブの煙突を森の中に隠し、温度計2つを潰してこなごなに破壊、そこらへんにあった物ほとんどをめちゃめちゃにバラまいた。

夏の終わり、私のキャンプ近くで、バイカー連中が大騒ぎして、ハイキングを台なしにされた。連中が通るのがよく見える道路に、ちょうど彼らの首あたりの高さに合わせ1本のワイヤーを張った。（次の夏、そのワイヤーに引っかからないよう、誰かがそれを木に巻きつけているのを見つけた。残念なことだ、誰もケガをしなかったらしい）。

私は再びマインXを訪れ、ディーゼルエンジンと、車のガソリンタンクに大量の砂糖を入れてきた。連中が、私の山小屋の近くにある廃棄場用に岩の採掘作業をしていた時期は、夜になるとそこに行き、連中が置いていったおんぼろピックアップ・トラックのガソリンタンクにも、どっさり砂糖を入れた。秋には、ロチェスター・ガルチの、とある山小屋に行った。地面のわだちを見て、確信した。バルディから東にのびる尾根でバイクを暴走させ騒音を巻き散らす連中の山小屋だ。その小屋の裏には、スノーモービル2台とクート（4輪のオフロード車）が1台あった。そのクートとスノーモービル1台に、砂糖を注いだ。しばらくして、またこの山小屋を訪れると、近くにディーゼルの土木機械が1台、停めてあったので、燃料タンクに砂糖を入れた。それから窓をひとつ、窓枠からはずし（例の、窓の破壊に関する心理的抑制だ）山小屋の中に入り、斧を1本盗み、連中の6つのベッドのマットレスを切り裂き、ソファに切りつけ、3分の1ほど残っていたウォッカのボトルの中身をぶちまけてやった。

次の夏、誰かを殺そうと仕掛け爆弾をセットしたが、どんな種類で、どこに仕掛けたかは記さない。もしこのページを誰かに見られたら、そのワナが作動しないよう取り外されてしまうからだ。だが殺害か重傷を負わせる5回のチャンスのうち、1回成功すればいい方だろう。それからまたロチェスター・ビル・クリークの分かれ道沿いで、バイカーどもの首の位置にワイヤーを張った。し

しばらくして行ってみると、ワイヤーはなくなっていた。誰かがケガをしたかどうかは不明だ。

サウスフォーク・ハムバグの上で、サーティサーティウィンチェスターで雄牛の頭に弾をぶちこみ。そこを離れた。その雄牛は農場の牛だ。大鹿のメスではない。それから下に降り、車がぶつかっただけに見せかけ、リー・メイソンの郵便箱を斧でめっちゃめっちゃにしてやった。

秋、ダルトンマウンテン・ロード沿いにあるいくつかの山小屋へ行った。中の家具類がきちんと整頓された小さなトレーラーハウス1台が駐車場に駐車してあった。山小屋の外で見つけたサビついた動物のワナを盗んだ。例の心理的抑制を克服するため、トレーラーの窓の大半を叩き割り、ライフルを手に中に入り、コールマン・ランタン1つと、ガスランプの備品2つをこなごなに破壊した。山小屋の窓ガラス6枚を割った。その隣の山小屋で、トレーラーの新品のタイヤを撃ち、穴をあけた。そこは道路のそばなので物音が聞こえないか気になり、さっさと引き上げた。

幼少期からの洗脳の結果として、これらの行為には強い抑制感情があり、乗り越えるために、大変な労力を強いられた。今や、捕まる可能性がかなり低い状況なら、人を殺せるような気がする。とはいえ確たる自信はない。洗脳の強い力は、しばしば個人の意向を上回るからだ。

動機だが、私は個人の自立性を奪うテクノロジー社会を嫌悪している。ある意味、避けがたいのかもしれないが、人々の行動様式ゆえにそうなるのだ。ゆえに、私はテクノロジー社会に生きる人々と、それに関連する現象、オートバイ、コンピュータ、そして心理コントロールが嫌いだ。安定した職につく者の大半は、彼の側に貢献している。もちろん、私がもっとも嫌悪する人々は、自覚的にわざとテクノロジー社会を促進する連中、科学者、ビジネスマン、政治家たちだ。私の動機は個人的な復讐心によるものだと強調しておく。ある種の哲学的、道徳的理由によるものなど、取りつくろうつもりはない。道徳規範などという概念は、単に社会が人々の行動をコントロールするための心理的ツールのひとつに過ぎない。

1978年の5月、シカゴ・エリアに戻ったのは、主に以下の理由による。そのことにより、科学者、ビジネスマン、といった人々を殺害する試みが、より安全に実行できる。共産主義者も殺害したい。モンタナを発つ前に、箱を開けると爆発するよう細工した爆破装置を作った。見た目は長細い箱だ。レンセリア工科大学のカタログから1人の情報工学教授を選び、彼宛てで爆弾小包に住所を記入した。シカゴのダウンタウンで投函しようとしたが、郵便ポストに入らない。郵便局の投函口でチェックしてみると浅すぎて、長い箱だとはみ出してしまう。マーチャンダイズ・マートの郵便局だけが受けつけているようだが、そこで数日前、切手を買ったので、また行くと顔を覚えられるのではないかと不安になった。そこで爆弾の箱をイリノイ大学シカゴサークル・キャンパスに持って行って、科学技術研究棟の近くにある駐車場に停めてあった2台の車の間にこっそり置き去りにした。学生の1人-できれば科学分野の-がそれを見つけ、良き市民として郵便局に届けるか、あるいは自分で箱を開け、手を吹き飛ばされるか、死ぬことを期待してだ。後で各新聞をチェックしたが、私のしたことが何か事件につながったという情報は見当たらなかった。やましい感情はこれっぽっちもなく-それどころか、自分のしたことが誇らしくさえあった。ただ、人を殺害するか重傷を負わせることに成功したかを確認られたらいいのだが。

今月の始め、私は2番目の爆弾をノースウェスタン大学技術研究所の“卒業生リサーチ”と記された部屋に置いてきた。爆弾は葉巻の箱の中に入れ、開けると爆発する仕組みだ。爆弾を郵便で誰かに宛てて出すかわりに、自分で持ち込んだのだ。トリビューン紙（5月9日付）によると、爆発で卒業生1名が切り傷とヤケドで入院したとあった。残念なことに、記事には彼が一生元に戻らない障害を負ったという記述はなかった。あれは人を殺せるほど強力な爆弾ではなかったらしい。（中に仕込んでおいた鉛の散弾が1発も急所に命中しなかったのか）それでも被害者は、目を失うか、両手を吹き飛ばされるか、重傷を負うかであってほしい。病院送りにしてやったので、何も起こらないよりはマシだが。満足な結果にはほど遠い。ダイナマイトを入手する方法を知りたいものだ。

ところで、これらのページを、日誌の他のページと分けて保管する動機は明らかである。他の日誌のある部分にも、犯罪をほのめかす程度のものはあるが、

実際の重罪につながる明白な記述はない。しかしこれらのページは人目にふれないよう注意を払い、小型で簡単に隠すことができるコンパクトな容器にしまっておかねばならない。

数字が羅列されている2冊のノートより、1985年
(2011年解読)

冬

飛行中の旅客機を爆破する計画だった。1979年の夏の終わりから秋の初めに装置を組み立てた。気圧計や、爆薬のカートリッジが入った箱をたくさん、材料をグレートフォールズまで買いに行かなければならなかったのも、多くの出費になった。缶に1クォート以上無煙火薬を入れ、2000フィート、場合によっては3500フィートの高さで装置が爆発するように気圧計を取り付けた。10月末にシカゴから、航空便で郵送されるように速達で発送した。あいにく飛行機は破壊されなかった。爆弾が弱過ぎた。新聞は「低威力爆弾」と報じていた。驚いた。1979年にも書いたが、なぜ爆弾が弱かったのか考えた。今はその理由が分かる。無煙火薬は勢いよく燃えるが爆発物ではないし、その燃焼力を完全に活用できたとしても箱が弱すぎた。起爆装置もあまり当てにならなかったようだ。シカゴ・トリビューン紙によると、飛行機はワシントンに近づくころ爆発したとのこと。ザ・サン・タイムズ紙によれば、ワシントンまであと半分というところで爆発したと乗客が証言した。そのずっと前に起爆するべきだった。バロメーターの欠陥だ。1971年の加圧情報を参考にしたが、もしかしたら今はもっと低い高度で加圧するのかもしれない。バロメーターの針の接触が軽いので、電流をきちんと通さないのかもしれない。爆弾自体も大した成果を得られなかった。郵便物をいくつか破壊したくらいだろう。飛行機への損害はなかった。少なくとも乗客を怖がらせはした。かなり濃い煙が客室まで入り込み、そのせいで飛行機は目的地以外の場所に緊急着陸した。トリビューン紙は、混乱はなかったと伝えた。しかしサン・タイムズ紙によると、飛び上がって可哀想なスチュワーデスに向かって叫び声を上げていた者もいたらしい。FBIの捜査事件になったそうだ。上等だ、FBIよ。おれのチンポを舐めてみろ。

1981年5月、ちいさな爆弾（爆薬が2オンス以下）をカリフォルニア大学バークレー校の情報工学部に仕掛けた。これは私の記録では、装置第2号、実験83になる。同時に、大きめの爆弾（装置第1号、実験82）をワシントン州、オーバーンのボーイング社に郵送した。ボーイング社の爆弾の結果はわからない。バークレーの爆弾は大きさのわりにはうまく行った。ハウザーという、26才の情報工学修士課程の空軍パイロットの男が重傷を負った。もし場所が悪ければ彼は死んでいただろう。彼は主に右腕に傷を負った。目撃者は、“腕全体が吹き飛び”、そこら中に血だらけになったと言っている。ある新聞は、腕が“ずたずたになった”と伝えた。またある新聞は、彼の腕は“粉々になり”、腕と手は二度と完全に元通りにはならないだろうと伝えた。さらに片目も負傷した。ある新聞は、小さな情報端末研究室が“破壊された”と言った。それはあり得ない。私はどんな人物が仕掛けを爆発させたのかを読んでほっとした。学部生の、しかも情報工学専攻でもない若者が拾うかもしれないと心配していたからだ。しかし、この男は明らかに典型的な技術階級の一員だ。もしかしたら私の家の上空に糞ジェット機を飛ばしていたやつかもしれない。そう思うと、私の息苦しさや、解消しがたい怒り、そしてシステムに対する無力感が大きく和らいだ。同時に、男の腕を不自由にしてしまったことを悪く思ったことは認めざるを得ない。これにはずいぶん思い悩んだ。私は恥ずかしく思う。なぜならこの気持ちは哀れみから来ていて、それは我々がさらされる訓練やプロパガンダまたは洗脳が促すものだと確信しているからだ。しかし私が自分のしたことを後悔しているとは思わないでほしい。押さえつけられた怒りの解消の方が、この心地悪さよりずっと重要だ。私は同じことを繰り返すつもりだ。威力のない爆弾の失敗が続き、私は不満で絶望的になっていた。このシステムによってめっちゃめっちゃにされたすべての自然のために、復讐をしなければならない。

更に新聞を見てみると、ハウザーの腕は“切断あるいは、ほぼ切断”と出ていた。指先3本が吹き飛んだらしい。ハウザーは3人の子の父だった。彼は自分の夢が断たれるのではないかと恐れていた。その夢とは宇宙飛行士になることだった。私はもう彼を不自由にしてしまったことについて、気にしなくなった。一方で時間の経過によってそれを“乗り越えた”こともあるし、もう一方で彼の憧れがあまりに低劣だったからでもある。他の新聞も調べた。ボーイング社の爆弾については何もない。おかしい。かなり綿密に設計され、組み立てたの

で、誤動作はほぼないはずだ。

先日、樂園のような氷河峡谷でキャンプした。夜、美しい鳥のさえずりが不快なジェット機のうなり声で台無しにされた。私は航空機のパイロットを不自由にさせたことに、少しでも罪の意識を感じたことを思い出して笑った。

1981年の夏頃から、耐えがたい機械の騒音を聞くようになった。気象条件によっては時に驚くほど大音量だ。その冬、いつもは心地いい私の旅の多くが、何マイルも先まで丘を越えて聞こえる鉄の怪物のうめき声や遠吠えによって台無しにされた。私は復讐を決心した。しかしその音の出どころを特定するのは難しかった。どのみち夏まで待たなくてはならなかった。雪があると足跡で簡単に追跡されてしまう。しかし、騒音は春には止んだようだった。そしてまた1982年の夏の終わり頃から聞こえ始めた。音をたどると、ウィロークリークの伐採作業場からだとわかった。私のお気に入りの原野を伐採していた。木をのこぎりで切り倒さずに、ブルドーザーで押し倒していた。彼らの休業日に行ってみると、地面一面が完全にはぎ取られていた。丸太を持ち上げてトラックに積むために使う重機の上に、5ガロンのオイル缶が置き去りにになっていた。私はそのオイルを重機のエンジンにかけて火をつけた。山の頂上で気持ちのいい夜を過ごし、朝のんびりと家に帰った。自分の行為のおかげで非常にいい気分だった。疑われる危険で、わずかに心配にもなったが。

二、三年前、何人かのアホどもがステンプル・パス道路の向こう側に別荘を建てた。オートバイとスノーモービル好きのやつらだ。連中は夏も冬も毎週末のように、行ったり来たり私の小屋の前を猛スピードで通り過ぎた。去年の夏はいつもに増してひどかった。週末に3日間続いた時もあった。まったく堪え難いもので、心臓が悪くなってきた。心理的ストレス、そして何よりも怒りによって、心拍が不規則になる。絶え間ない騒音への怒りで息がつまり、心臓は爆発しそうだった。自宅のすぐ近くで犯罪をおかすのは危険を伴うが、やつらをどうにかしなければ怒りで死んでしまうと思った。そこである秋の夜、私は彼らが別荘にいるところへ忍び寄り、チェーンソーを盗んで沼に埋めた。何週間か後に、奴らの家に斧で押し入り、内部をほぼ完全に叩き壊した。とても豪華な場所だった。奴らはトレーラーハウスも持っていた。私はそこにも侵入し、見

つけた銀色に塗装されたオートバイを斧で叩き壊した。外にはスノーモービルが4台あった。そのエンジンも斧で徹底的に破壊した。1週間ほど後、警察が誰かこの辺りで建物にいたずらをしている人を見かけなかったか聞きに来た。私自身オートバイ嫌いなのかも聞かれた。事実には突き当たったのだが、質問のいい加減さから察するに、真剣には私を疑わなかったようだ。警官の質問に冷静に応える自分に満足を感じた。

1982年5月、私はコンピューター専門家のパトリック・フィッシャーに爆弾を送りつけた。彼の秘書がそれを開けた。ある新聞は彼女が入院したと伝えていた。状態は良いが、腕と胸に傷を負ったらしい。他の新聞は、爆弾のせいで木の破片が彼女の体に食い込んだと書いていた。しかし彼女が永久的な障害を負ったという記述はどこにも無かった。自分が致命的な爆弾を作れないことに苛立ちを覚える。復讐の試みは、かなりの時間を食い、他の仕事を遅らせていた。しかし私は成功しなければならない。何としても復讐しなければ。

それから間もなく、6月か7月だっただろう、私はカリフォルニア大学のバークレー校へ行き、ガロン缶一杯のガソリンに入れたパイプ爆弾を情報工学科棟内に仕掛けた。新聞によると、コンピューターサイエンス学部の副学部長が手に取ったようだ。彼は「指を失う危険からは脱した」と見られたが、手の骨と腱の負傷のため手術が今後必要とのことだった。どうやらパイプ爆弾は起爆したが、ガソリンには引火しなかったらしい。理解できない。苛立たしい。こうした攻撃のための旅費は、私のか細い資金源には大きいのだ。

昨年夏、丘の至る所でダイナマイトの爆発音が轟き、時々私の小屋にまで聞こえた。エクソン社が指揮する原油探鉱のための地震探査だった。丘の上全域を飛んでいる何機かのヘリコプターが、ケーブルにつけたダイナマイトを下ろし、地面で爆発させ、計器で振動を測定する。8月の初め、クレーター・マウンテンの東側に向かいキャンプしてヘリコプターを狙撃しようと思った。思ったより難しかった。ヘリコプターは常に動いているのだ。一度だけ少しチャンスがあった。ヘリコプターが2本の木の間を通過するときに、即座に2発撃った。どちらも外れた。小屋に戻り私は涙を流した。失敗の悔しさもあるが、大部分はこの野生に起きていることに対する深い悲しみからだった。ここは本当に美

しい。しかし彼らが原油を見つけたらもうおしまいだ。見つけられなかったとしても、爆発とヘリコプターによって損なわれてしまう。安らぎと静けさのために私はどこまで行けば良いのか？帰り道、私はホーガム・クリーク近くの木製の電柱を斧で切り倒した。

1985年6月の初め、これらのノートに記録した数々の失敗の後、ついに成功した。効果的な爆弾を開発するために1年半の多大な労力を要した。4.5の硝酸アンモニウム（化学肥料から採取）の割合に対して、極めて微細なアルミニウム粉（アルミ塗料から採取）1を、同じ強度の金属プラグがついた鉄製の水道管に詰め、内部で点火した。簡単なことだったが、これを試す前に何度か失敗した。直面した難題を記しておく。明白な理由により、化学薬品を店舗で注文することができないので、作るか又は手に入る材料から抽出するしかない。素材を運ぶ車がないし、図書館へのアクセスは困難だ。備品は限られ、気持ちのバランスを保つ必要があり、資金は少ない。

実験100。11月中旬、ミシガン大学で行動療法を研究するジェイムス・V・マッカーネルに爆弾を郵送した。マッカーネルの助手が軽い怪我をただけだった。燃焼したが爆発はしなかった。パイプが少し弱かったか、爆薬の密度がわずかに高過ぎたことが失敗に繋がったに違いない。

実験97。1985年12月11日、木材のかけらに見せかけた爆弾を、サクラメントのレンテック・コンピューター・ショップの裏に設置した。サンフランシスコ・エギザミナー紙に、フリーダム・クラブと名乗る団体の名で手紙を出した。爆弾の犯行声明と同時に反テクノロジーのテロ組織だと宣言した。12月13日までのロサンゼルス・タイムズ紙、そして12月14日までの他の新聞を調べたが、爆発物に触れた記事は見つからなかった。何か問題が起きたのではないかと恐れを抱いた。ひどい挫折感を覚え、また冬の間ずっと新しい爆弾を作らなければならないのかと思った。そこで私は弟に手紙を書き、彼のところを訪れる予定を取りやめる言い訳を述べた。

その後12月20日付けのサンフランシスコ・エギザミナー紙によると、店の「オペレーター」（店主、マネージャー）が、12月12日に「粉々に吹き飛ばされて」

死んだそうだ。すばらしい。人間的な抹殺の仕方だ。彼は何の痛みも感じなかっただろう。25,000ドルの報奨金が提示された。かなり嬉しい。しかし記事には、どの団体からも声明はなかったと記述されており、私の手紙のことも書いてなかった。手紙が着いていないのか。様子がおかしいと思ったが、実験97が結果的にとてもうまくいったので、私はやっぱり弟を訪れる準備をすることにした。

声明文と監獄でのインタビュー、1995/2001

夏

人類は、我々が「パワープロセス」と呼ぶものへの欲求を持っている。パワープロセスには四つの要素がある。そのうち三つの最も明確なものを、我々は目標・努力・目標達成と呼んでいる。四つ目の要素は、もっと定義しにくく、すべての人に必要なわけでもない。我々は、それを自律性と呼んでいる。自律性をほとんど必要としなく感じる人がいるのも確かである。こうした人は、権力への欲求が弱いか、自分が所属する強力な組織と自分自身を同一視することで満足しているかのどちらかである。さらに、純粋に肉体的な力の感覚で満足しているように見える、何も考えていない動物的タイプの人間もいる（自分の力の感覚を、戦闘技能の上達によって得ている有能な戦闘兵は、上官に対する盲目的服従でその戦闘技能を行使することで非常に満足を感じる）。しかし、大部分の人々にとって、自尊心・自信・権力意識を得られるのは、パワープロセス—つまり目標を持ち、“自律的”努力を行い、その目標を達成することを通じてである。

“自由”と言う際に我々が意味しているのは、代償活動という人工的な目標ではなく、本物の目標を持ち、誰からの（特に大きな組織からの）邪魔も・操作も・監督もなく、パワープロセスを経験する機会があるということである。自由とは、自己の存在の生と死という問題—つまり衣食住と、周辺環境にあるかもしれない様々な危険に対する防衛—について（個人あるいは小さなグループのメンバーとして）制御することができる状態にあることである。自由とは力を持つことである。他者を管理する力ではなく、自分自身の生にかかわる

状況を管理する力である。誰かがある人に力を行使できるような状況にある場合、その人は自由ではない。その力がどれほど慈悲深く、寛大で寛容に行使されようともだ。自由を単なる容認と混同しないことが大切なのだ。

憲法で保障された権利がいくつかあるのだから、私たちは自由社会に生きている、と言われる。しかし、こうした権利はそう思われているほどには重要ではない。社会にどの程度個人的自由があるのかは、法律や政府形態よりも、社会の経済・テクノロジー構造によって決められる。ニューイングランド地方のインディアン民族の大部分は君主制だったし、イタリアのルネッサンス期の都市の多くは独裁者が統治していた。しかし、こうした社会についての本を読むと、現行社会よりも遥かに多くの個人的自由が許されていたという印象を受ける。その理由の一つは、支配者の意思を押し付ける効率的メカニズムがなかったからだ。近代的で充分組織化された警察も、速度の速い長距離コミュニケーションも、監視カメラも、平均的市民の生活に関する情報の調査書類もなかった。従って、統制からうまく逃げるのは比較的容易だったのだ。

憲法で保障された権利に関して、例えば、言論の自由を考えてみよう。無論、我々はこの権利を打倒せよと言っているのではない。この権利は、政治権力の集中を制限し、政治権力を持つ人々の不正行為を公に明らかにすることで、そうした人々を正しい状態に保つために非常に重要な道具である。しかし、言論の自由は、個人としての平均的市民にはほとんど役に立たない。マスメディアは、大抵、システムに統合されている大きな組織の統制下にある。金を少ししか持っていない人でも何かを印刷したり、それをインターネットやそれに類するやり方で流通させたりすることができる。しかし、その人が伝えたいことは、メディアが生み出す莫大な量のマテリアルに圧倒され、現実に何の効果ももたらさないだろう。従って、大部分の個人と、小さなグループが、言葉で社会に感銘を与えることはほとんど不可能なのだ。例えば、我々（フリーダム・クラブ）について考えてみよう。我々が暴力的なことを行わず、出版社に文書を提示しただけだったなら、その文書が受け入れられることなどないだろう。その文書が受け入れられ、出版されたとしても、多くの読者を引き付けることなどないだろう。地道なエッセイを読むよりも、メディアが生み出すエンターテインメントを眺めているほうがもっと楽しいからだ。こうした文書が多くの読者を

獲得した場合であっても、読者の大部分はすぐに自分が読んだことをすぐに忘れてしまう。その精神は、メディアがばらまく大量の素材で溢れかえっているからである。我々のメッセージが、人々の目にふれる際に永続的感銘を与える可能性を作るため、我々は殺人を犯さねばならなかったのだ。

かつて人間は社会の発展に一定の制限を設けていた。人々が押しえつけられることがあっても、限界が存在した。しかし今日ではそれが変わりつつある。なぜならば現代のテクノロジーは、抗鬱剤、監視の技術、肉体的な抑圧、様々なプロパガンダの手法、心理的なテクニック、生物学的・神経学的な手段や遺伝子工学などを使用して、人間を矯正するあらゆる手法を発展させているからだ。

我らの社会は、システムに有用ではない思考や行動様式は、全て“病んでいる”と考えがちである。ある個人がシステムに適合できない時、その個人は痛みを感じるし、システムにも問題が生じるため、その考えはもっともらしい。それゆえ、個人を適合させるための操作は“病氣”の“治療”と捉えられ、だから良いことだと考えられている。

産業社会は今後も存在し続けるだろうから、テクノロジーはやがて人間の行動様式を完全にコントロールすることに近づくだろう。

尾根の上まで登るのに、まず険しい上り道がある。私が狩りをしようと思っているひらけたロッジポール松の森へは、その後 1 マイルそこそこの平坦な道を歩く。松の木々の間を少し入ったところで、カンジキウサギの足跡を見つけた。一時間ほど、どこに向うか分からない、そのもつれた軌跡をあちこち追跡した。そこで突然、真っ白なカンジキウサギの黒い目と、黒い耳の先が目に入る。一番最初に気付くのは、大抵この黒い目と黒い耳の先である。ウサギは最近倒れた松の緑の葉と枝の陰から私を見つめている。ウサギは 40 フィート程の距離にいるが、警戒して私を見つめているので、それ以上近づかなかった。とにかく、撃つための角度をとって、枝の間を抜けてきれいに命中させるために。どうするか考える必要があった。ほんの小さな枝でも 22 口径弾の軌道をそらし、失敗

する可能性があるからだ。命中させるために、私は雪の中で不自然な姿勢で横たわり、固定するために銃口を膝に乗せた。照準をウサギの頭、目のちょうど後ろ辺りに定め、動かずにパン！ウサギの頭が吹き飛んだ。このように撃たれると、ウサギは即死するが、大抵後ろ足が数秒の間激しくバタついて、雪の中を跳ね回る。ウサギの足の動きが止まった頃に私は近づいて行って、それが死んでいることを確認した。声を出して言う。“ありがとう、おじいさんウサギ”。おじいさんウサギというのは、私が創り出した半神で、全てのカンジキウサギの精霊である。周りの真っ白な雪と、松の木々越しの陽の光を見つめ、2、3分立っていた。静けさと孤独を身体に取り込んだ。ここで過ごす気分は良い。しめ縄を一本ポケットから出した。持ち運ぶため、しめ縄をウサギの首に掛け、縄のもう一方を、自分のミトンした手に巻き付けた。それから他のウサギの足跡をまた探し始めた。

自然と親しむほど、その美しさをより理解できるようになる。その美は、風景や音に内包されているだけでなく、全てを理解することに存在する。どう表現していいかわからない。重要なのは、単に森へ訪れるのではなく、その中で生活していると、その美は自分の人生の一部となる。それは、外から眺める類いのものではなくなるのだ。

自然との親しみで得られるものとは言う、五感が研ぎすまされるということである。聴覚や視覚の正確さが増すというよりも、多くのことに気が付くようになる。都市生活では、人は内側へ向きがちだ。環境が、不必要な視覚や音声に満ちているので、自動的にそれらの多くを自分の意識からブロックしている。森の中では注意が外側に向き、環境へと向うので、自分の身の回りで起きていることをもっと意識する。例えば、目立たなくても、地面の食べられる植物や動物の足跡などに気付いたりするのだ。人間が通って、ほんの一部足跡が残っているだけだったとしても、恐らくそれにも気付くだろう。耳に届く音が、何の音かも分かるはずだ。これは鳥のさえずり、これはウマバエの羽音、驚いた鹿が逃げ出したな、とか、あれはリスが松ぼっくりを切り落とす音だ、材木の上に落ちたな、ということまで分かる。認識できない音が聞こえると、それがいくら小さくてやっと耳に届くかくらいの音であっても、即座に自分の意識を捉える。私にとって、この緊張感、あるいは五感の広がり、自然と親しんで

生きることの最大の贅沢である。それは自分自身で経験しないことには理解できないことなのだ。

ヒュー・キャンプ・スクラットン
1946-85

トーマス・J・モッサー
1944-94

ギルバート・マレー
1947-95

セオドア・J・カジンスキーによるテキスト
(無許可での使用)

ジェームス・ベニング
2012

(翻訳：西村美須寿、尾関加純、山下宏洋)